

俳聖芭蕉における滑稽

飯塚ひろし

今日なぜ、芭蕉の俳諧が話題を呼ぶのか。

芭蕉の芸術は、大胆かつ果敢に「人為の道」を切り拓いて極点にまで達した点にある。芭蕉は漂泊の詩人でもあり「野ざらし紀行」「笈の小文」「更科日記」「おくのほそ道」などの紀行文を後世に遺した。

この中で芭蕉は、武士像（義経、義仲等）への強い憧憬を持ち続けていた事が考察されている。

また「新しみ」を追求した芭蕉が究極的に行き着いたのが「かるみ」の俳境であった。この「かるみ」が飄逸な作品を生み、読者の微苦笑を誘い「笑い」の原点にもなったのである。

謹厳・実直な芭蕉にも、可笑しみとウイットに富んだ作品が多々ある。江戸期の俳諧ながら現代にも通用する「笑い」について述べてみたい。

一つぬひで後に負ぬ衣がへ （笈の小文）

更衣の時期を、昔の人は現代よりも厳密に守っており、この句は四月朔日に詠まれたものである。旅中でもあり、無造作に一枚脱いで背中に背負っただけの事であるが、それが芭蕉の旅道中の更衣であると済ましている。

可笑しみとウイットに富んだ作品で、表現の「軽さ」にも関わらず、奥行きが感じられる。

一家(ひとつや)に遊女も寝たり萩と月 (奥の細道)

前にも述べたが、紀行文「おくのほそ道」の中で最も美しく艶めいた作品である。襖一枚の隣部屋に遊女が寝ているとの設定は、虚構にせよ気になって芭蕉は寝苦しい一夜を過ごしたろうと可笑しくなる。

後世になって物語的興味を盛るための虚構だろうとする見方もある。「萩と月」の解釈は遊女と芭蕉との取り合わせでもあるが、芭蕉が萩で遊女が月などと想定すると可笑しみが倍增する。遊女が隣に寝ておれば芭蕉でなくても寝苦しい。

蚤虱馬の尿する枕もと (奥の細道)

現代生活では蚤や虱は無縁とされるが、最近アタマジラミが復活の兆しと言う。

高名な俳諧師芭蕉ともなると、旅には紹介状を携えて供連れである。

この際も、境田の庄屋の家に投宿していて、馬小屋になど泊まっていない。

馬と鼻つき合わせて寝たとの設定はユーモアたっぷりである。

この作品の面白さは、過酷な現実が明るく、のびのびと表出された点にある。芭蕉は「尿前(しとまえ)」の地名に鄙びた面白さを感じ取ったのであろう。

むざんやな甲(かぶと)の下のきりぎりす (奥の細道)

当時のきりぎりすは現代のコオロギの事を指す。兜を手にし、白髪を染めて合戦した悲劇の武人・実盛の首級に思いを致し、芭蕉は詩のモチーフを得た。「あなむざんやな」は謡曲[実盛]から引いたものであるが、無残な想いが極限に達した頂点で「ふと鳴き出したコオロギ」にほっと顔の筋肉が弛みニヒルな笑いにと変わる。

「甲の下のきりぎりす」は「むざんやな」の具象化で、沈潜された切実な響きを持

つ。武士像に憧憬を抱く芭蕉の青年のような一途さは実に微笑ましい。

猪もともに吹かるる野分かな（江鮭子）

芭蕉が直接猪を見たのではなく、台風に曝された山中の草庵での心細さを詠んだものである。暴風雨の中の我と猪の身の上を思いやり、猪の姿だけを拡大的に描き出し何とも滑稽で哀愁を帯びた作品である。

芭蕉の猪への愛情は実に微笑ましい。

鞍壺に小坊主乗るや大根引（炭俵）

馬の鞍に童が乗り、あたかも中国の南画を思わせる牧歌的な情景。「小坊主」を中心に据えて、軽いユーモアを感じさせるように句の焦点が置かれている。

〔新しみ〕を追求した芭蕉は「軽み」の境地に到達した。小坊主が鞍の上で、居眠りなどしていると大いに笑いを誘う田園風景である。

ぴいと鳴く尻聲悲し夜の鹿（笈日記）

奈良・猿沢の池畔での作。

筆者の住む出雲の北山で十月、牝鹿を恋う牡鹿の鳴き声が聴かれる「尻聲」とはあとを引く牡鹿の声である。牝鹿を呼ぶ牡鹿の高く長い鳴き声は、古来和歌に詠み古された素材である。しかし、芭蕉は「ぴいと」「尻聲」などの言葉により、歌には詠まれなかった新しい境地を拓き、「軽み」を追求したものである。

発情期の牡鹿の妻を呼ぶ声は、物悲しくも滑稽である。可笑しみの裏には哀愁が漂う。

秋深き隣は何をする人ぞ（笈日記）

この作品は「此の秋は何で年よる雲に鳥」と共に、芭蕉の生涯の発句の頂点に位置する。単純で淡々とした表現だが、この句から我々は深い感銘を受ける。現代社会に於いても隣人には無関心で、壁を隔てた隣人は「何する人」か知れず不気味さが募る。芭蕉と隣人はそれぞれ孤独でありながら、その孤独を通じて繋がり合っているのだ。隣に極悪人が潜んで居るかも知れず「何する人ぞ」とはブラックユーモアの最たるものである。芭蕉も隣人もお互いに相手の様子を窺うなどは可笑しみと寂寥感とが増す。

元禄二年三月、芭蕉は「おくのほそ道」へ第一歩を踏み出す。芭蕉の旅は常に新しい創造を求め、去りゆく季節に追い縋る如く続けられた。それは封建社会の呪縛から逃れ、万物流転の実相に迫る自由人の心の軌跡の貴重な記録でもあった。芭蕉が崇拜され、神格化されるに至ったのは、門下の有力俳人が輩出し、蕉門一家を形成したからである。